

キリストを伝えるカトリック月刊誌  
福音宣教 2020年12月号

月間テーマ 住処を探して

オリエンズ宗教研究所

## インタビュー 「アルペなんみんセンター」を立ち上げて

有川憲治



一九六二年生、鹿児島県奄美市出身。NPO法人アルペなんみんセンター理事、事務局長。NPO法人移住者と連携する全国ネットワーク理事。

### 「アルペなんみんセンター」設立の経緯

—まずはアルペなんみんセンターについてご説明ください。

私は東京教区の移民・難民支援部門・カトリック東京国際センター（CTIC）で二五年間働かせていただきました。その間、さまざまな事情で住む場所を失い、「どこでもいいので泊めて欲しい」との相談がたくさんありました。小教区や修道会などに依頼をして受け入れていただいたこともありましたが、長期にわたったの受け入れに応えることができませんでした。住居支援も含めた総合的な支援体制が必要だと感じていました。

いつか実現させたいと長年、考えていました。昨年六月、鎌倉黙想の家（イエズス会日本殉教者修道院）が閉鎖されると聞き、イエズス会に難民支援のために貸し

ていただけないかと相談したところ、使用の許可をいただきました。運営に関して、既存の難民支援団体に協力を打診しましたがどの団体も人的余裕がないと、断られました。思案した結果、無謀にも（笑）、難民支援に関わっていた方々と、去年一〇月にアルペなんみんセンターを設立し、今年二月にNPO法人として認可されました。

四月から、イエズス会日本殉教者修道院を日本に逃れてきた難民支援の活動の場として使わせていただいています。住居のない難民を八名受け入れています。

団体名は、イエズス会の初代日本管区長、第二八代イエズス会総長のペドロ・アルペ神父に由来します。アルペ神父は、総長時代、インドシナ難民支援のため、イエズス会難民サービスを設立され、現在五六カ国で

難民支援に取り組んでいきます。

——行先がない方々は今までどうしていたのでしょうか。

民間団体が人道的な見地から、住居のない難民への緊急シェルターを提供しています。トータルで部屋数が三〇ほどしかなく、いつも満室です。日本政府からの経済的な支援もありますが、もらえる方はひとにぎりです。多くは、友人・知人に頼った生活を余儀なくされています。公園で寝泊りするしかない方もいます。在留資格が切れた方は、就労して自活することもできません。

——日本には潜在的にどのくらいそういう方がいらっしゃるのでしょうか。

難民認定申請は、年間一万人ほどです。ただ、申請して結果が出るまで数年かかります。しかも、難民として認められるのは、数十人程度、申請者の一％以下です。一〇年以上待ち続けている方も多くいます。欧米ではだいたい半年くらいで申請の結果が出ます。また、入国時から、住居も含めたセーフティネットも用意されています。

——活動資金はどうされているのでしょうか。

寄付での運営です。できたばかりの団体ですから厳

も、精神的にも追い込まれています。

アルベなんみんセンターは、困窮する難民のための受け皿になりたいと思いい設立しました。

難民との出会いの場をつくる

——その他、今後のプランをお話いただけますか。

イエズス会日本殉教者修道院は、宣教師が日本語を学ぶ場として建てられ、その後、黙想の家として使われてきました。難民のシェルターとしてだけではなく、黙想会や研修会にも使っていたのだと思います。まず、フィリピンや南米からの信徒の黙想、祈りの場としても活用できればと考えています。

また、鎌倉には、年間二〇〇〇万人の観光客が国内外から訪れます。空き家問題も深刻で、一〇〇〇軒ほどの空き家があります。将来的には、難民の力と空き家を活かして、ゲストハウスなどを運営できればと考えています。雇用創出、居場所の創出です。

自然な団体の広がり

CTICでは、本郷教会（文京区）をお借りして、難民への食糧支援、日用品支援のほか、交流ランチ、

しいです。四月から、小教区などを回って、寄付の呼びかけを行う計画をしていましたが、それもコロナ禍で、難しくなっています。食費、水道光熱費、医療費など、難民一人当たり月六万円くらいかかっています。ただ、主の御心に添う活動なら、必要なものは、主が与えてくださると信じています。今までも、何度もあるような経験をしてきましたので、あまり、心配はしていません（笑）。

難民認定を巡る現状

——認定される数は極めて少ないのですが、そうすると認定されない人というのはどうなるのでしょうか。

迫害の待つ母国への帰国を選ぶ人もいます。ただ、多くの難民は、母国での迫害の恐怖から、帰国できず、再度、難民認定申請をしています。手続き中に、在留資格が切れ、出入国管理庁に収容される方も多くいます。身元保証人、保証金、住居が確保されると仮放免される場合もあります。

仮放免では、健康保険に加入できず、就労も許可されません。居住する都道府県を越える移動は、その都度、出入国管理庁の許可が必要になります。経済的に

日本語教室を開催し、難民の居場所の提供をしてきました。難民との関わりを通して、ボランティアが自主的に支援を始めることもありました。その中から、難民を支援する二つのNPO団体、一つの会社、一つのグループができ、難民支援の輪が広がりました。

そのうちの一つの団体のいきさつを紹介します。ピースアクセサリー作りが得意な方が、難民にピース作りを教え始めました。その働きに賛同し、多くのボランティアが集まり、NPO法人としてスタートしました。難民が作ったピース作品を販売し、売り上げの一部をアフリカの難民キャンプに送金し、日本の難民がアフリカの難民を支援する活動として発展しました。昨年、設立一〇周年を迎えました。

アルベなんみんセンターでも、難民と出会うさまざまな試みをしていきたいと考えています。特に、学生たちに難民に出会っていただきたいと思っています。その出会いを通して、世界の難民問題に関心をもってもらえたらうれしいです。

難民支援のきっかけ

——有川さんご本人が今日に至るまでの歩みをご紹介いただけますか。

ますか。

きっかけはやはり難民との出会いです。学生の時、イエズス会社会司牧センターの安藤勇神父が企画されたタイ体験学習に参加しました。三週間のプログラムで、二週間は、ミャンマーの国境に近いカレン族の村に、ひとりでホームステイ、残りの一週間は、バンコクに戻って、大学生との交流。初めての海外旅行で、電気、ガス、水道はなく、言葉も通じない村の二週間は、貧しさとは何かを身をもって体験する貴重な機会になりました。大学生との交流では、自分が何も考えてこなかったことを思い知らされました。

帰国後、見てきたことを伝えたいと、大学でサークルを作りました。ちょうどその頃、インドシナ難民を日本の教会として受け入れる方針が出され、ベトナム人兄弟に日本語を教えるという依頼がきました。ベトナム料理につられて（笑）、毎日通うようになりました。親しくなるにつれ、ベトナムのできごと、ポートピールとしての体験を分かち合ってくれました。私と同年代の彼らがたどってきた道に衝撃を受けました。

インドシナ難民のことを多くの人に伝えたいと、教

で三時間、乗合のオートバイで三〇〇分の場所がありました。その間、軍の検問所が三〇カ所ぐらいあり、時々、丸焦げのバスも見かけました。

フィリピン派遣に際し、受け入れの神言会の神父から「専門家ならいない、村に住み、一緒に村人と考えるなら来て欲しい」と言われ、それなら私にもできると思いました。村では、さまざまな試みをしました。が、基本は、村人と共に折り、働き、食事をし、村の問題をよく話し合いました。

村では、みんなに守られている感じがありました。そこにいた四年間は自分の中で宝になっています。

### 日本の現実を見つめる

フィリピンから帰り、しばらく、信徒宣教師会の事務局で働きました。カトリック中央協議会が、四谷から潮見に移転するに際し、国際協力委員会（現、難民移住移動者委員会）のもとに、信徒宣教師会が位置付けられることになり、中央協議会で働くことになりました。

カトリック中央協議会の隣にある潮見教会の大原猛神父が、CTICの担当になり「手伝ってよ」と誘わ

会や学校でセミナーをしたり、「人間の大地」の著者犬養道子さんの講演会を企画したりもしました。また、相馬信夫司教様に司式をお願いし、ベトナム難民とクリスマスを共に祝いました。

彼らの出会いを通して、難民、アジアに関わる生き方の模索を始めました。

### フィリピン滞在中で得た宝

フィリピンで出会った司祭から「アジアのことを知りたかったら、フィリピンに住みなさい」と言われ、大学卒業後、アジア・アフリカのリーダーを養成しているアジア学院（栃木県）に一年間お世話になりました。その後、カトリック信徒宣教師会（現、JLMM）から、フィリピン・ミンダナオ島に四年間派遣されました。

——でも治安が悪いころですよ。

当時、マルコス大統領の二〇年にわたる独裁政権が終焉し、アキノ大統領が誕生した直後でした。私が派遣されたミンダナオ島ではまだ、混乱が続いており、軍と共産ゲリラ、イスラムとの衝突が頻発していました。私の派遣された村は、空港があるダバオからバス

れ、一年間ボランティアとして働きました。当時、エントナーテイナーとして来日したフィリピン人女性がトランプに巻き込まれるケースが多く、フィリピンでの経験が活かせる場を与えられたうれしかったです。その後、専従として東京教区に雇っていただき、それから二五年が経ちました。

### CTICとともに歩んだ二五年

——二五年のCTICの活動はどのように移り変わってきましたか。

CTICで働き始めた頃、日本に住む外国人は一三〇万人でしたが、今は、三〇〇万人になっています。日本を訪れる外国人も年間三〇〇〇万人を超えています。コロナ禍で一時的には、減少するでしょうが、今後外国人は私たちの隣人として増えていくと思います。

最初の頃は、フィリピン人への対応が多かったです。生活相談だけでなく、未払い賃金、医療の対応など、幅広い分野でのケースワークを求められました。

その後、日系人、国際結婚、外国にルーツをもつ子どもたち、外国語ミサのニーズの増加、初聖体などの

多言語の信仰教育の教材開発など、活動が広がっていききました。

二〇〇〇年に入ると、アメリカの同時多発テロの影響で、在日アフガニスタン人が一斉に入管に収容される事件が起きました。彼らを支援するために弁護士団が立ち上がり、仮放免後の住居を含めた生活支援の依頼がきました。小教区や修道院をお借りして、三〇人位のアフガン難民を一年半くらいサポートしました。

彼らを支援する過程で、多くの難民が入管に収容されているのが分かり、定期的な面会支援が始まりました。面会し、外部との連絡用にテレホンカードの差し入れや、仮放免のための保証金、保証人の提供、仮放免後の住居、生活支援など、活動が広がってきました。並行して、難民を支援する団体のネットワーク「NPO法人なんみんフォーラム」の立ち上げに関わりました。現在、二一団体が加盟し、国連難民高等弁務官事務所もオブザーバー参加しています。二〇一二年には、法務省、日本弁護士連合会と「難民問題に関する三者協議会」を設け、意見交換を行っています。

また、全国の外国人支援に取り組んでいる団体、個人のネットワーク「NPO法人移住者と連帯する全国」

自然と交流が生まれてくるのではないのでしょうか。高齢化する日本の教会にとって、移民・難民の存在は、大きな希望だと思います。

——全面的な教会主導ではなく、教会的なつながり、イエズス会の協力、NPOという形でできるというのは新しい形ですね

イエズス会の全面的な支援がなくては、できなかった活動だと思います。修道院の使用許可をいただいた際に「御法人の活動の目的と活動内容は、イエズス会の宣教活動の目的に完全に合致します」との言葉をいただき、涙があふれました。

教会ベースのアルベなんみんセンターは、今後も教会と連携を取りながら、難民が日本社会に受け入れられるように、広がりのある活動にしていこうと思っています。

——有川さんの今までの経験で一番うれしかったことは何でしょうか。

相談に来られた方が、抱えていた問題が解決した時の、安堵と笑顔にたくさん出会いました。一番はなんでしょうね。アルベなんみんセンターを始められることになったことですね。

ネットワーク」の運営にも参加し、ロビー活動、関係省庁との交渉、政策提言も行ってきました

日本は、一九八二年に難民条約に加入し、それから三七年間で受け入れた難民は、わずか七五二人です。年間数十万人受け入れている欧米と比べ、条約加盟国の責務を果たしているとはいえない状況が続いています。

### 困難、喜び

——そのために試みがなされてきたと思うのですが、教会全体という点で難しさはどこにあるのでしょうか。

現在、日本のカトリック教会は、日本人信徒より外国人信徒が多くなっていると推察されます。ただ、ミサの時間が、日本人は午前、外国人は午後と住み分けが進んでいます。パザールなどの行事を除き、あまり日本人と外国人と接点がありません。カトリックのダイナミズム、「時のしるし」を感じられる機会が、すぐそばにあるのに残念です。

各小教区で、外国籍信徒と接点をもつ工夫、仕掛けが必要だと思います。外国語ミサをしている小教区では、日本人信徒が外国語ミサに参加することによって、



NPO法人アルベなんみんセンター  
〒248-0001 鎌倉市十二所八十  
イエズス会 日本殉教者修道院  
TEL 0467-5515422  
郵便振替口座 00250161107205  
NPO法人アルベなんみんセンター